



| | |
|------------------|---|
| Title | ウポポイの向こう側に見える白老 |
| Author(s) | 田村, 直美 |
| Citation | 境界研究, 12, 151-157 |
| Issue Date | 2022-03-31 |
| DOI | https://doi.org/10.14943/jbr.12.151 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/85042 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 010.pdf |



[特集：ウポポイの／での研究]

【コラム：白老町にとってのウポポイ】

ウポポイの向こう側に見える白老

田村 直美

はじめに

ウポポイが営業を始めてから一年が過ぎた。この間、新聞社などからウポポイについて取材を受けることも度々あり、アイヌ文化に関心が高まっていると素直に嬉しいと感じている。一方で、道外に呼んでいただいた際に感じたことは「ウポポイの認知度の低さ」だった。アイヌ文化を知る人が少ないという事を実感することができた。現在も生きているアイヌが日本にいるという事を知らない人がほとんどだった。

知人やお客様の中には、ウポポイを訪れた事で、自身がアイヌ文化について「知らなかった」事にショックを受け、「もっと知りたい」と思ってくれる方、あるいは、「展示がきれい過ぎる」、「テーマパークのようだ」と物足りなさを感じる方の二つに分かれていた。

「きれいすぎる」、確かにその感は否めない。歴史の中であった事実が「和人目線」と感じた人も少なくないと思う。アイヌがどのような文化を築き継承しながら発展していったことよりも「アイヌに対し優しく親切にした和人、外国人」を称えている銅像や石碑が目立つ。アイヌの功績も和人ありきの紹介にも違和感がある。確かに「助け」はあった。でもその前提として和人がアイヌの言葉を、文化を、土地を奪ったことにより起きた事は深く触れていない。そもそも……が語られていないのだ。

なぜ、ウポポイはそうなったのか？

なぜ、アイヌは知られていないのか？

なぜ、アイヌ文化は広がらないのか？

この「なぜ」を追求し学んでいくうえで様々な想いが交差した。

わたしが自身のルーツを受け入れられたのは六年前のこと。多感な時期にアイヌとして苛められ、故郷が嫌いになり離れたと思った。両親からルーツのことを聞かされていなかったの、本当に自分はアイヌなのかと半信半疑、そうではないことを願いできるだけ

目立たないように過ごしてきた。母親から知らされたのは二人目の女の子が生まれた時だ。わたしは結婚できない、子どもも産めないと思っていた。苛めによって大きくなっていった自己否定感自身を追い詰めていた。ご縁があつて結婚できた時、子どもは自分に似ないでほしいと思っていた。自分と同じ辛い思いをさせたくなかったからだ。一人目は父親似、ホッとした。二人目が生まれた時、喜びと共にこの子の将来を不安に思った。わたしとそっくりだったからだ。わたしと同じように苛められないか……。この事を母に吐露した。その時に母の口からはっきりとアイヌの血が入っていると聞いた。「やっぱり……」。わずかな希望が断たれた時だった。ここからルーツを受け入れるまでは自分自身の葛藤の日々だった。もっと早く知りたかったと思い始めた。知っていて苛められた方が辛いながらも納得できたのではないか。

「子どもたちには理解できる年齢になったら伝えよう」と思っていた。実際はどうだったか。……なかなか伝えられなかった。自分自身が受け入れることができていない、負に思っていることを伝えられる訳がなかった。両親も同じだったのではないか……。知ってプラスにならない事実を子どもに伝えられるだろうか。知らないままでいた方がいい事もある、そう思ったのではないか。両親の気持ちを理解できた。高学年になり、子どもたちの口からアイヌのことが出たら伝えようと思った。そして、伝えた時、鼓動が激しくなり汗が流れた。子どもたちの反応は「へえ、そうなんだね」、「なんとなくそう思っていた」だった。「アイヌと言って苛められていないのか?」、との問いに、「大丈夫」と言っていた子どもたち。時代が変わったのかと安堵したのを覚えている。しかし、二十歳になった娘から「実はアイヌと苛められていた」と聞いた時は涙が止まらなかった。母子家庭で必死に働いている母親に心配をかけまいとだまっていたらしい。「今はこの顔でよかったと思っている!」と言った笑顔にわたしは救われた。

両親が生きていた時代は戦後まもなくで誰もが生きるだけで必死だった。アイヌ文化のことをほぼ知らず育っていた両親の子どもの頃の話を知っていると、アイヌと言われてもどこか他人事でただ馬鹿にされているのは感じていただろうと推測できた。どんどん自身のルーツから離れていく時代だったのではと思う。

わたしが自分のルーツを受け入れられたのはある言の葉と出逢ったからだ。当時勤務していた会社のグループの中で研修会のライングループができていた。そこにリーダーの上司が毎朝発信する偉人たちの言の葉があつた。あの日の朝届いたメッセージを読み、わたしは初めて自分の身体の中にアイヌの血が流れていることに誇りを持てた。その内容は「アイヌ民族は自分たちも自然の一部であるという素晴らしい精神性を持った民族である」だった。「自然の一部」……。この部分は特に心に響いた。人間が一番偉いと思うのは傲慢だ。みんな同じなのだと思えた時、力が抜けた。

ルーツを受け入れたことで、わたしはアイヌの歴史をもっと知りたくなった。そして知

っていく中で「知られていない」理由に導かれていく。

「教育」

この「教育」という、「教える」環境が重要であること。ここをコントロールされた時、間違った事実が真実のように教えられた時に悲しい事が起こる。

歴史の教科書に載っていた「アイヌ」は、開拓に来た和人から見て「未開の土人」。自然と共に生き、自然に沿って生きていたアイヌの人々の姿は西洋文化と比較され「野蛮」とされた。

文明人であれとアイヌ文化が禁止され、「和人」となったアイヌ。明治生まれの祖母は着物で育ち、日本語が母語となる。母も漁師の家で育ち、お客様に三つ指ついて挨拶、畳のへりは踏まないなど、和人流の厳しい躰があったと聞く。幼少の頃に茅葺屋根のチセをおぼろげに覚えている程度。もうすぐ80代になる母の世代もアイヌの文化を親から伝承されていないというのが事実だ。学校の歴史でも教わらない。教育の中でアイヌはほぼいない存在と言ってもいいことになる。わたしの世代も教科書の中で見る「アイヌ」は、開拓民が北海道に入った時に居た裸足で毛むくじゃらな人たちと言う描かれ方だった。挿絵もそうだったので、すごく嫌だったことを覚えている。親に聞かされていない、歴史の勉強の中でも正しく知らされてない、この環境下でどうすれば誇りに思えるのか。「アイヌ」と言う事はプラスにならない、出したところで偏見の目にさらされる、差別を受けるなら隠していた方がいい、そう思うのは自己防衛本能による自然な流れだったと思う。

教育の中で知らされていた事実だけを知っていれば、北海道命名150年、松浦武四郎の偉業を称えることは、わたしの普通であり北海道の歴史の中の大きな出来事だったのだと思う。だが、アイヌの歴史を知れば知るほど、この「150周年」は、アイヌの側からみると決してめでたい事ではない。なぜなら、北海道命名の年はアイヌ同化政策が始まった年、アイヌの歴史が断たれた年だったからだ。150年はアイヌがアイヌとして生きられなくなってからの150年でもあることを知っている人は少ないと思う。

この事実は表に出さず、ただ北海道命名150年を祝っていることに違和感をもったアイヌがどれだけいただろうか。なんの疑問を持たず150年を受け入れているアイヌがほとんどなのではないだろうか。ここにも、アイヌに対する日本の思惑があるように感じる。その延長にあるのが「民族象徴空間ウポポイ」なのではないか。

アイヌが日本の先住民と国が認めたのは外からの力が大きい。1987年にアイヌ協会が国連先住民作業部会に参加し、世界にアイヌ民族の存在をアピールしたことで世界が動いてくれた。そこから21年経った2008年によりやくアイヌ民族を先住民とすることを求める国会決議が採択され、アイヌ民族の独自性や差別の歴史を認め総合的な施策を進めていくことになった。確かに、アイヌ文様刺繍教室などの工芸の講座、アイヌ語教室などは増え

た。文化の伝承と言うときれいに聞こえるが、「なぜ、文化が断たれたのか」、「なぜ、アイヌ語を話せないのか」、この多くの「なぜ」についてはあまり触れてないように思う。そのことを踏まえた上で、「ウポポイ」はどこまでアイヌ文化を出してくるのかという点に注目していた。結果は、多くの人が感じた、「キレイ過ぎる」だ。

「アイヌ語を話せないのにアイヌと名乗るのか」、「アイヌに税金が投入されているのはおかしい」といった批判は歴史を知っていれば出ない発言だと感じている。歴史を知れば、日本が行った行為はあってはならない事だと解ると思う。その事でいかにアイヌが大変な想いをし、子孫まで負の連鎖が引き継がれてきたことに理解を示せるのではないだろうか。

わたしはこれまでの歴史振り返り責任とってほしい、保証をしてほしい等とは思わない。わたしの中にも開拓民の血が入り、この文化の恩恵を受けていることもたくさんあるからだ。ただ、知ってほしいのだ。

歴史の事実を知れば前述のような発言は出ないと思うからだ。昨年、問題となった「あ、犬だ」発言。犬を見て言う事は自然な事だが、アイヌの人に向かって言う事が過去のトラウマを思い出させ辛い思いをさせることを言った当人は知らなかった。わたしも実際に「あ、いぬだ」と言われ嫌な思いをしたことがある。犬に似ているとかそのレベルで言われるのではなく、馬鹿にした蔑む視線を浴びながら言われる「あ、いぬだ」はとても傷ついた。知らずに全国放送で言ってしまった当人、録画だったのにも関わらずそのまま放送してしまったテレビ局。すべては知らない事で起こった。わたしは知らずにしてしまった方たちを責める気はない。「事実を知らなかった」と言う事が罪で、では、なぜ知らないのかを考えた時に、「教育」と言う場で正しい事実を知る機会がなかったからだ、わたしなりの結論に行きついた時、怒りは無くなり、過去の悲しみも癒えた。

今思うことは、歴史の事実を教育の場で伝えてほしい、知る機会を与えてほしいと言う事だ。知る事で悲しい出来事は減る。知ることで思いやりが生まれる。そう信じている。

なぜアイヌ文化は広がらないのか

わたしがアイヌ文化の発信を始めた頃は、アイヌのルーツを持たない方に向けていた。発信を行う中で、自ら歴史を学んでいくうちに、また新たな「なぜ」が生まれる。

北海道と命名されてからアイヌの文化は少しずつ断たれ、生きるための生業もできなくなっていった。生命を維持するために必死に生きてきたアイヌの人たち。アイヌと言う事で差別と偏見を受けながらも、和人の文化を受け入れ精一杯生きていた。アイヌと知られると嫌な想いしかしないので、ひた隠す。アイヌは自分のルーツを誇りに思えない環境下に居た。アイヌとして生まれた曾祖父は、アイヌとして暮らしていた時のことを子どもたちに話していなかったと聞く。同化法以前は誇りをもって暮らしていたと思う。曾祖父の

名前は「サリキテ」。「槍を早く高く投げられる」という意味があったという。その名前をもらって誇りに思わなかった訳はないだろう。大きな時代の流れの中で、アイヌがアイヌではなく和人として生きていかなければいけなくなった時、誇りは隠して生きるしかなかった。漁場で働き、和人から漁を教わった後、自分の漁場を持ちウタリを雇い入れた。子どもたちは父の大変さを目の当たりにしながら、自身も“和人”同化法とされながらも“土人”と区別され、差別や偏見の中で生きていたら……辛い思いしかならないのにアイヌ歴史を知ろうと思うわけがない。その負の連鎖は現代に続いているのである。

わたしも文化や歴史を知ろうと心に決めた事はルーツを受け入れた後だった。調べ始めて、知れば知るほど、すごい。わたしが知っているごくごく一部のアイヌの歴史とは全く違った。

文化を持ち、大陸との交易で豊かに暮らしていた。旬の物を必要な分を必要な分だけ採り分かち合う。自然、物、全てにカムイが宿り大切にしていた。文字を持たなくても交易ができていたと言う事は、話すだけで十分な信頼関係を作り得たという事ではないか。アイヌは未開の土人ではない、独自の文化を持った素晴らしい民族だったのだと解った時、とても嬉しかったのを覚えている。この事実を一体どれだけのウタリ(仲間)が知っているだろうか、そう考えた時に同じルーツを持ち今も苦しんでいる人たちにも知ってほしいと思うようになった。

わたしは起こった出来事に対し「善悪」つけない。つけたところで起きた事実は変わらない。でも、自分の中の「真実」は変えることができる。わたしは歴史を知ることにより自分の中の「アイヌ」の真実が変わり誇りになった。ここを取り戻せたので、多少の誹謗中傷は受け流せるようになった。自分を知る、受け入れる事は自らの軸を強靱にし、心を強くし、「自分を生きる」事ができると実感した。これはアイヌに限らないことだと感じている。

多文化共生の象徴として生まれたウポボイ。なぜ今、多文化共生なのか？ウポボイスタートの年に猛威を振るい始めたコロナウィルス。当たり前が当たり前ではなくなった日常で世界中が疲弊していった。生きるという本当の意味、人が生きていく中の本質。物質の豊かさが幸せだと思い込んでいた人たちが、「何か違う………」と疑問を持ち始めた。本当の豊かさとは「心の豊かさ」だと気づいた時、アイヌの精神性が現代を生き抜く時に大きなヒントになること、違いがあつてこそ可能性が広がること、多くの違い、いろんな文化が融合し共に生きることが真の「多文化共生」だと世界が気付いてきたのではないか。

白老町はアイヌ民族と開拓民が融合し共生してきた町だ。白老町民が白老を知り、アイヌ文化を知ることが大きな鍵になってくると感じている。白老町史に書かれ始めた時が白老の始まりではない。縄文土器も発掘されている。古くから文化を持ち生きていた人がいたのだ。白老は自然が豊かで人が生きる為の環境が整っている素晴らしい場所だと言う事を、町民自身が知り誇りに思っしてほしい。お金に換えられない尊い価値がここにはある。

そしてルーツを持った方たちがアイヌの血が入っている自分を受け入れ自分を生き始めた時、さらに可能性が広がっていくと信じている。アイヌを隠し和人として生きてきた方にとって容易なことではないことも解る。とても深い悲しみを抱えている方が多いので、なかなか言葉が届かず、「そんなことをして何になるのか！」との心の叫びを受け止めることもある。でも諦めず、届くと信じて伝えていきたい。一人一人の中にカムイがいる事、誰もが光を持っていることを。

これからウポポイが、国も民族も性別も世代も障害もすべての違いを認め合い、尊重し融合しながら共に生きる世界へ進むための象徴へと進化していく様子を近くで見えていきたいと思います。白老にウポポイができた意味が必ずある。「アイヌ」博物館ではあるが、人類が幸せを感じて生きる為に必要な事が詰まっていると感じる。アイヌを通じて誰もが自分を生きられる社会に、本当の多文化共生の道へ導く場となる事を願っている。

多様性——「個」の数だけ可能性が生まれる

ルーツを受け入れた時に将来は白老に帰ろうと思った。癌になった後、残りの人生を後悔なく生きたいと思い自分を大事にすること、自分がやりたいことをやろうと決めた事で夢を思い出した。

「誰もがホッとできる喫茶店をやりたい」。そこに向かい動き始めた時は白老でやろうとなど少しも思わなかったわたしが、自らのルーツを受け入れた瞬間、地元社台でやろう、店名もアイヌ語にしようと決めた。数年後、実際に店を始めようと想い立ち、店名も決めた。

「コミュニティカフェ ミナパ チセ」。アイヌ語のミナパは「たくさんの人で笑う、大勢で笑う」、チセは「家」。たくさんの人が笑顔で居られる「居場所」になるように願いを込めた。白老町の中でも一番人の少ない社台で始めることに周囲は心配した。でも、この土地でやりたかった。自分が生まれ育ったこの土地から始めることは、わたしのその後の活動の中で大事な部分であった。

ミナパチセを通じたくさんの方と出逢った。そしてたくさんの方の想いを聴いた。生きづらさを抱えている方、深いトラウマを抱えている方、違いを受け入れられない社会の中で苦しみ、辛い思いをしている当事者と家族、アイヌのルーツを持つことを否定している方も。本当の多文化共生とは外国に対することだけではなく、全ての文化が融合し共に生きることだと気付いたことで、生きづらさを抱えている人たちが自分の得意な事や、やりたい事で社会とつながり輝ける場を創りたいと思った。その後、NPO法人を立ち上げ動き始めた。名前はアイヌ語でウテカンパ。「手を取り合う、手をつなぐ」という意味だ。白老町の皆さんと手を取り合い、多文化共生の社会を白老で実現させ、世界一やさしい町にしたい。そういう想いから名付けた。立ち上げから二年目に白老町から地域女性活躍推進事業

を受託された。たくさんの方の応援を受け、NPOとして動き始めることができた。これまですべてが順調だったわけではない。多くの困難を乗り越え、現在ミナパで出逢った仲間とウテカンパの事業ができています。すべてはつながっていて、集まった一人一人がそれぞれの「個」を発揮したことがたくさんの方の笑顔につながった。

わたしにできることは小さい。でも、雫が落ちできた小さな波紋が共鳴し共感し、ほかの小さな波紋と融合してゆき、大きな波紋となり実現に向かう。

「壮大な夢ですね」とよく言われる。一個人では成し遂げるのは難しいと感じる方も多いだろう。たくさん「個」が集まればその数だけ可能性が生まれる事を確信した今、自分の想いに従い進むだけだ。

多文化共生の向こう側にわたしの見たい景色が待っていることを信じて。イヤイライケレ。